

# ジョルジュ・ペレック *La Disparition* の 「忠実な」翻訳

——スペイン語・ロシア語・日本語訳におけるゲームの規則——

前山 悠

これらの数々の翻訳の中で、どれが忠実なのだろうか？  
私の読者はそれを知りたがることだろう。繰り返して言うが、  
これらはどれも忠実ではない。あるいは、どれもが忠実なのだ。  
——ホルヘ・ルイス・ボルヘス、「ホメロスの翻訳」<sup>1)</sup>

## 1. Eが無いことを語るEの無い小説の翻訳

問題となる小説の紹介も兼ねて、「その翻訳はなぜ難しいのか」という話題から始めることにしよう。

「アルファベットのEを一度も使わずに書かれた」云々、*La Disparition*<sup>2)</sup>に対する読者の認識がこうした一言に還元されてしまうことを、ペレックは折に触れては嘆いていたものだった<sup>3)</sup>。けれども翻訳者にとっては、その簡潔な定義は作者が思うほどに単純で表層的に過ぎはしないだろう——作者とは別の種類の嘆きを招く原因とはなるかもしれないが。そこに示された言語制約、すなわち「リプログラム<sup>4)</sup>」は、この作品の翻訳において再現されるべき要件にほかならないのである。

一方で、ペレックが次のように弁明する *La Disparition* の特質は、その翻訳に課される第二の制約を提示するだろう——「そのeの無い本の主題は、eの消失なのだ<sup>5)</sup>」。ここで問われるのは、ペレック作品の中でも特に *La Disparition* において偏執的に実践された、メタテクスト的な言語遊戯である。つまり、テキストの諸々のE無しの語句は、まさしくテキスト全体がE無しで書かれているという事実を、その綴りや音の仕掛けによって暗号のように示唆すべく組み込まれている。手近な例として、小説の主人公の名前に着目してみよう。彼はその名を Anton Voyl といい、物語は彼の行方不明事件を発端として展開する。この事件の謎から導き出されるのは、次のような解答である—— *La Disparition* の物語は、Anton Voyl / atone voyelle (「無強勢母音」、すなわちE) の「消失

disparition」によって始まる。かくして翻訳者にとっては、Eのリポグラムに加え、テキストをあまねく埋め尽くすこうした暗号的仕掛けの再現が、重い懸案事項として押し掛かるということになる。

偶然にも *La Disparition* と同年に出版された研究書『翻訳の理論と詩学』の中で、その著者は以下のように述べている。「ある言語で述べられることは、別の言語でも述べることができる。ただし、形式がメッセージの本質的な要素である場合を除く<sup>6)</sup>」。紛れもなくこの留保の条件に該当する *La Disparition* の翻訳において、具体的にいかなる難題が生じうるかを知るには、この小説の最初に刊行された翻訳であり、原典と同じくEのリポグラムの下で為された、オイゲン・エルムレによるドイツ語訳の表題が参考となるだろう<sup>7)</sup>。その *Anton Voyls Fortgang* (『Anton Voylの退去』) というタイトルからは、二つの点が即座に理解される。原題は直訳されなかったということと、主人公の名は改変されなかったということだ。一見していかなる変哲もないこの二つの判断は、実のところ、*La Disparition* の翻訳を通じてつきまとう二種類の困難の表れだと言えるだろう。その第一に、この翻訳はしばしば妥当な直訳を禁じる。例えば *La Disparition* という題名を直訳できるのは候補となる訳語が禁止文字を含まない場合のみであって、その幸運は「Erlöschen」や「Verschwinden」といったドイツ語には生じない。第二に、この翻訳はしばしば不当な直訳を強いる。Anton Voyl という名前をそのまま残しても、フランス語の枠組みの外では先述した仕掛けとしてもはや機能しない。だが、元来その仕掛けが成立していたのは、「母音」を意味する「voyelle」という語それ自体が切り落とされるべき母音を綴りに含んでいる、という偶然によってであり、そしてこの幸運もまた、ドイツ語の「Vokal」という語には訪れなかったのである。

無論、こうした場合においては、人物名とその暗号の仕組みを翻訳者自ら作り直すという方策も考えられるだろう。しかし、同様の言語遊戯がおびただしく散りばめられたこの小説において、そうした「書き換え」を重ねていったなら、その翻訳は終局的にいかなる状態へと行き着くだろうか。これについて、文学集団ウリポにおけるペレックの同僚ハリー・マッシューズは次の見解を示す。

*La Disparition* は、翻訳されぬままであるべきだ。(さほど難しくもない) 技術的な障害のせいではなく、分解しえぬ一体性が、この本の(時には句

読点にまで及ぶ) 各側面を規定しているのだから。外国語においては、この小説を作り直すことしかできないだろう。新たな人物、新たな出来事、新たな構成を仕立て上げながら、つまりは、別の新たな本を書くことによって<sup>8)</sup>。

以後で扱うのは、この「別の新たな本」に陥る危険性という観点では、いっそう剣呑な賭けを選んだ三つの翻訳である。すなわち、フランス語におけるEのリプログラムの難易度を再現すべく、該当言語の事情に合わせて制約事項を変更した翻訳——マルク・パレイールが率いた翻訳グループによるA無しでのスペイン語訳 (*El Secuestro*)、ヴァレリー・キスロフによるO無しでのロシア語訳 (*Исчезание*)、そして、塩塚秀一郎による「い段」(ないしはI) 無しでの日本語訳 (『煙滅』) である<sup>9)</sup>。この原典のあらゆる要素を規定していた前提条件の変更は、言語制約下での翻訳それ自体は「さほど難しくもない」とのたまったマシューズの見解にも増して果敢と言えるだろうし、特にその先鞭をつけたスペイン語訳に対しては、果敢に過ぎると咎める批評が寄せられないでもなかった<sup>10)</sup>。実際のところ、争点となっているのは、作品全体の象徴となっていたものの変換なのである。

したがって、その三つの翻訳で問われており、また本稿が以下で考察の対象とするのは、原典への本来的な意味とは異なる「忠実さ」ということになる。それがあつた種の逆説を帯びるといふことは現段階でも既に明白だろう。つまり、制約事項の変更の目的が示している通り、ある面において冒涇と見られる処置は、別の面における同じ対象への際限なき献身と言うほかないのだ。

## 2. 再現のための改変

サンプルとなる一箇所翻訳例を、つまりはその三言語における例を挙げる前に、該当部分の原文をまず示すことにする。下に添えるのは、その字義通りの訳として試みた、すなわちいかなる制約とも無縁の拙訳である。

[Anton Voyl] s'installa avocat à Aubusson, mais à coup sûr ça n'alla pas fort. J'ignorais pourquoi mais trois mois plus tard; j'appris qu'il travaillait à Issoudun, y faisant du Droit Commun. Plus tard, il s'installa à Ornans : [...] il circulait toujours à moto. [...] / Plus tard, il nous posta un pli final. Il racontait qu'il travaillait à Ursins, dans l'Ain. [...] J'ai vu dans un Atlas qu'Ursins avoisinait Oyonnax, au

mitan du Jura. [...] Puis, pour finir, on apprit qu'il vivait à Yvazoulay, un trou, pas loin d'Ursins, dont on ignorait tout. (p. 209-210)

([アントン・ヴォイル]は弁護士としてオービュッソンに身を置いたけど、きつとうまくいかなかったんでしょ。理由は分からないけれど、三ヶ月後、彼がイスーダンで、一般法関係で働いているということを知りました。その後、彼はオルナンに住みました。[...] いつもバイクで走り回っていたみたいです。[...] その後、彼から最後の便りが届きました。アン県のユルサンで働いているとのことでした。[...] 地図帳で見たところ、ユルサンはジュラ山脈の中心で、オヨナと隣り合っていました。[...] そして最後に、彼がイヴァズレーで暮らしていることが分かりました。そこは僻地で、ユルサンにほど近い、全く知られていない場所でした。)

次に、い段抜きでの『煙滅』において、この箇所がどのように日本語へ移し変えられたかを見てみよう。

粗々伝わるころでは、ボンはアランソンへ住んで、まあまあうまくやってたようだよ。それからどんなことがあったのか、三ヶ月後、今度はウエッサン島の小屋で鬱々と籠ってるって噂だった。それから、エヴルーへ移ったそうよ。[...] どれほど遠方でも、徒歩でえんえん歩くとか。[...] その後、彼からカードを受け取ったわ。アルプスを望むオルナンへ住んでると書かれてた。[...] アトラスで探すと、オルナンのそばで訪れたことがあるのは、ヴズーとエクス＝レ＝バンだけだった。結構な穴場のようね。それから、ヤーエンとかって村へ住んだそうよ。(231頁)

何よりも先に、主人公名に関して、ドイツ語訳を見舞った不運を今一度想起し、それとは対照的な日本語訳における巡り合わせの妙を祝福しておかねばなるまい。そして、少なくとも字面としては軽微とは言えないこの変化（ヴォイル→ボン）と同種の現象が、訳文の全体に及んでいるという事実もまた、すぐに理解されることだろう。この『煙滅』と *La Disparition* との隔たりは、言語制約の差異だけでは説明がつかない。仮にそれだけの話ならば、主人公から法関連の仕事を奪い、彼を引きこもりにさせる必要などなかったのだから。そのようなわけで、ここで念頭に置かれるべきもまた同様に、原文に埋め込まれた暗号的仕掛けの存在と、翻訳者によるその処理方法ということになる。

この箇所のフランス語原文における仕掛けのポイントは大まかに以下の3つ

である<sup>11)</sup>。第一に、ここで主人公ヴォイルが次々と移り住む5つの土地 (Aubusson, Issoudun, Ornans, Ursins, Yvazoulay) の頭文字は、アルファベにおける順序通りに、Eを省いたフランス語の全母音へと対応している。第二に、この5つの頭文字は、それぞれの土地における描写に反映されている。つまり、ヴォイルがAubussonで「弁護士 avocat」を勤めるのは、彼がまさしくAと共に (avec A) いるからであり、Issoudunで「一般法 Droit commun」の仕事をするのは、彼の法知識への精通よりも「droit comme un I」 「直立不動 (Iのように真っ直ぐ)」という慣用句を原因としており、またOrnansでは「いつもバイクで走り回り il circulait toujours à moto」ながらも「Oの語を巡る il circulait toujours à mot O」という定めがあり、そしてUrsinsという「ジュラ Jura 山脈の中心でオヨナ Oyonnax と隣り合」う土地は、確かに自らのUr-を「Jura」の中心に置き、また語頭の母音順においてOyonnax と隣り合うのである。

最後の第三のポイントとして、Yvazoulayについてはまた異なる視点が必要となる。問題となっている5つの地名の中では唯一、このYvazoulayのみが実在しないのだが、マルク・パレイールに従えば、この架空の固有名詞の由来は次のように説明できる——その音に着目するなら、Yvazoulayは「il va où l'é」 「Eはどこいった?」という疑問文の書き換えに他ならない<sup>12)</sup>。そしてこのとぼけた問い掛けに、直後に置かれた語句が返答する。つまり、行方不明であるEは「trou」 「欠落」であり、「dont on ignorait tout」 「完全に無視されている」ということだ。

こうした暗号的言語遊戯の可能な限りの再現を、別の言語上かつ別の制約下で試みた結果として、『煙滅』というテキストはある。そして、以下にその再現の有様を表示するとおり、A無しのスペイン語訳とO無しのロシア語訳においてもまた、問われているものは同様なのである<sup>13)</sup>。

### 日本語版 (『煙滅』、231頁)

アランソン	「粗々 [あらあら]」、「まあまあ」
ウエッサン	「鬱々 [うつうつ]」
エヴルー	「えんえん」
オルナン	「アトラス [...] オルナン [...] ヴズーとエクス=レ=バン」、 「結構な穴場」
ラーエン	「[井] ラ [イ] エン : 「(井) を言えん」

スペイン語版 (*El Secuestro*, p. 187-188)

Egletons	« escultor » 「彫刻家」
Issoudun	« se le vio siempre riendo ¡ ji, ji, ji, ji ! » 「いつも彼がヒヒヒヒと笑っているのが見られた」
Oloron	« circuló siempre en moto » 「いつもバイクで走り回っていた」
Ussel	[反映無し]
Yquedelk	[y-que-del-k] : ¿ <i>Y qué de la [k]a</i> ? 「aはどうなった?」 ; « un rincón » 「僻地／忘れられた物」 ; « del que no he oído decir mucho » 「あまり話に聞かない」

ロシア語版 (*Исчезание*, p. 245-246)

Абвиль [Abbeville]	« Сначала [...] в Абвилье » : 「最初に [...] Абвилье で」 : абв = ロシア語のアルファベにおける最初の三文字
Ер [Eure]	[反映無し]
Йёна [Yonne]	
Иссудун [Issoudun]	
Урсен [Ursins]	
Вывулип [Vuvoulipe]	[вы-в-улип] : <i>Вы в улипе</i> 「あなたはウリポの中にいる」
Эз [Eze]	« южнее Вывулипа – селение Эз » 「Вывулипаの南に Эзの村落はある」 (= Ы から Э へ下る)
Ютц [Yutz]	« а если спуститься еще ниже – деревушка Ютц » 「そしてさらに下ると小さな町 Ютц がある」
Ярем-д'Атверс [Yarem-d'Atvers]	Ярем : <i>jougs</i> 「束縛」 + отверс[тие] : <i>orifice</i> 「穴」 « еще дальше, за Ютц, в Ярем-д'Атверс » 「… Ютц を越えてさらに遠く、Ярем-д'Атверс へ」 « забытую всеми дыру » 「皆に忘れ去られた欠落」

ここで三つの翻訳の間で比較を行うことは主眼にないし、上記の事例の一つ一つに言及を重ねることもまた控えよう。ただし、概括的な見地から、以下の点には着目しておきたいと思う。つまり、これらの訳出例は総じて、両義的な

印象を与えうるのであり、仮に望めば——ハリー・マッシュズは望むかもしれない——それがどれほど原文から逸脱しているかを述べ立てることもできるだろうし、全く逆に、それがどれほど原文に忠実であるかを——知る限りでは、これが一般的な反応である——褒め称えることもできる、そういった種類のものなのだ。

中でも、地名の一つに「ウリポ」の名を埋め込むにまで至ったロシア語訳は、次のように、この両義性において典型的な例を見せている。上記箇所での地名の訳出（あるいは創出）に対して、各言語の母音の数が影響していることは明白である。例えばスペイン語では通常 Y を母音として数えないのだが、ここでは地名の数を原典と合わせるべく例外的に母音グループへと組み入れ、最後の地名 Yquedelk にあてている（そして、*Y qué de la [k]a?* 「aはどうなった？」と問う）。一方、これと同じ話は日本語では通らない。そこで、『煙滅』ではワ行の「(ヰ)・エ・ヲ」も母音として数え、最後の地名「ヲーエン」に凝縮させている（そして「<ヰ>ヲ言エン」と嘆く）。対して、ロシア語訳では、その言語の相対的に余りにも多い母音の数に対応させるべく、原典での地名の数自体を変更してしまったのだ。これが、その翻訳者の選んだ「忠実さ」のあり方なのである。

そして、同様の処置はまた、マクロのレベルにおいても実行されることになる。争点となるのは、原典における部・章の構造と、翻訳におけるその再現である。*La Disparition* は全 6 部・26 章構成であり、この 2 つの数字はそれぞれフランス語の母音とアルファベの総数に合致している。そして、禁止文字 E が 6 母音中の 2 番目にあたるということで、第 2 部の表示が欠けている。また E は 26 アルファベ中の 5 番目であるため、この小説は第 5 章を持たない<sup>14)</sup>。こうした構造を反映すべく、まず A を制約とするスペイン語訳においては、第 1 部・第 1 章が存在しない。よって、第 2 部・第 2 章が物語の始まりにあたることになる。ここまでは単なる目次上の調整に過ぎないが、さらなる問題として、スペイン語のアルファベは 27 個であるため、章の数を 1 つ増やさねばならない。これには、原典の第 14 章を 2 章分に分割することで対処されることとなった。一方、日本語訳においては、これほど生易しい対応では目的を達成できない。結果として、全体で 48 章となるべく原文はさらに細かく分割され、かつ「い段」の順番にあたる章がすべて不在となった。さらに、原文の第 5 部と第 6 部が統合され、日本語での母音の数が反映されると共に、第 2 部がその姿を完全

に消した。

実のところ、こうした枠組みの再編成においては、もう一つ別の条件を勘案することもできる。最初で言及したとおり、*La Disparition* という小説の根底には Anton Voyl / aton(e) voy(e)ll(e) / E の「失踪」事件があるのだが、塩塚秀一郎を含めた複数の研究者は、物語におけるこの事件発生のタイミングが、第4章と第6章の間隙すなわち同じく失踪した第5章に当てはまるはずとの見解を示している<sup>15)</sup>。そして、この条件に沿った構成を完璧に再現しようとし、同時に、元の輪郭を完膚無きまでに破壊したのがロシア語訳である。その制約文字 O は、ロシア語では全10母音中5番目、全33アルファベ中16番目にあたる。そこで翻訳者は、第5部・第16章を不在とし、その位置が原典における空白の第2部・第5章に一致するべく章立てを組み直したのである。そのようにして、原文の第1部は4部分に、同じく第4章までが15章分へと分割される。また一方では、原典上の第6章から第26章までの22章分が、ロシア語訳における第17章から第33章までの17章分へと分配されることになる。

こうして本来の枠組みは跡形も無くなるだろう。しかしながら、先程も述べたように、このような方針こそ *La Disparition* の翻訳者たちが選んだ——またおそらくは選ばざるをえない？——「忠実さ」のあり方に他ならない。ここでは、原典を復元するためにはそれを破壊しなければならないのだ。そして、この点でとりわけラディカルに見えるロシア語訳者ヴァレリー・キスロフは、同時に、自らの翻訳が孕む逆説に極めて自覚的であると言える。

この翻訳では、いつでも翻訳がなされているというわけではない。あるいは、ほとんど翻訳などされていない。[...] むしろ、著しい差異を伴った原文の書き直しなのだ……。[...] 私の目的 [...] ——リプログラム作品の制約への忠実さ——は、[...] 直ちに疑問に付されるだろう。自らが作品の制約に忠実であると言う者は、正確には何に対して忠実なのだろうか？ [...] / 私は単語を取り換え、文全体を言い換え、テキストのことごとくを書き換え、詳細を改竄し、語調を転換し、名前とタイトルを変更し、人物を、町を、新たな作品を導入し、削除し、追加した [...]。原典の、いったい何が残ったのだろうか？ 私は模倣し、茶化し、移転し、違反し、移調し、歪曲し、冒涇し、変形し、変質させた。忠実であるために、私はまだ何をしていないだろうか？<sup>16)</sup>



あるいは、忠実であるために何が守られたのだろうか？ ロシア語訳者はそれを明示しないが、その回答はおそらく、ペレックの翻訳者によってではないにしても、それほどかけ離れてもいない作品の同業者から提示されるだろう。すなわちレーモン・クノー『文体練習』の翻訳に関して、そのイタリア語訳を行ったウンベルト・エーコは、次のように述べる。

こういったジャンルの作品に対しては、何が忠実であることを意味するのかを決める必要がある。明らかなこととして、それは字義通りであることではない。[...] 忠実であること、それは、ゲームの規則を理解し、それを遵守し、そして、新たなプレイをもう一度、同じ手数で行うことなのである<sup>17)</sup>。

ならば、*La Disparition* においては本来、いかなる類のゲームが組み込まれていると考えるべきなのだろうか。少なくとも、そのゲームはリプログラムという作者にとっての遊戯のみならず、読者にとってのそれをも内包すると言わねばならない——すなわち行われるのは、作者が処々に配置した暗号を読者が解読するという、推理小説にも似たやり取りなのだ。*La Disparition* というテキストはそのように、ある実行可能なゲームの総体なのであって、ゲームの言語を変えたとしても、そのコードとなる一文字を変更したとしても、それを手にした者にとって同じく実行可能でなければならない。そしてこの目的のためには、ウンベルト・エーコが言うとおりに、翻訳は字義通りであることができない。原典における「ゲームの規則」を作品の精神であり本質であると考えれば、その抽出と保存のために、テキストの肉体的要素は捨象されねばならないのである。原典の復元を目指してそれを破壊するという逆説は、かくして翻訳者たちによる暗黙の取捨選択を意味することになるだろう。すなわち、このテキストという建造物において、再現されるべきはその外観よりも機能であり、念頭に置かれるべきはその見取図よりも設計図であるということ——それが、彼らが読者とペレックとに提案する、*La Disparition* の翻訳というもう一つの熾烈なゲームの規則なのである。

### 3. 自我を持つ翻訳

そうしてテキストの「アイデア」とでも呼びうるものから、それぞれ多少なり

とも装いの異なった二次的創造物の一群が出現する時、果たしてそれらが従来「翻訳」と呼ばれるものに該当しうるのか否か、それはここでは問うまい。あるいは、ハリー・マッシューズがそれらの出来を見て満足すべきか否かを知ることともまた、本稿の主眼にはない。定義や是非の判断は避けつつ、ここでは最後に、次のような問い方を選ぶことにしよう。すなわち、*La Disparition* とその翻訳とされるものとの間に見出されるのは、いかなる関係性なのか。

それは、少なくとも互換性ではない。いかなる翻訳も原典とは互換性を持ちえない、という根本的命題とはまた別の話だ。これから目にするのはむしろ、翻訳が自ら原典との隔たりを際立たせ、積極的に自身を別のヴァージョンとして指さそうとする身振りなのである。もっとも、原典のひたむきな「再現」が話題を占めていたこれまでににおいても、そうした要素の存在は窺えないでもなかった。問題となるのはすなわち、「Вывулип»（「あなたはウリポの中にいる」）という地名の例に見られたのと同様の、原文には無い機能の純然たる追加であり、こうした行為は原典に対する「加筆」・「修正」として、その「再現」とは区別されるべきだろう。例えば、原文での「彼は煎じ茶を飲んで夕暮れ時に床に就いた Il s'alitait [...] au couchant, ayant bu son infusion (p. 21)」という箇所を、スペイン語訳は、「Longtemps je me suis couché de bonne heure» (p. 27) という見事な A 無し のフランス語で訳している。つまり、制約の変更を理由に、あるいはその誇張のために、潜んでいたプルーストが表に引きずり出されたのである。また次の例では、ロシア語訳者の曲芸が見られるだろう。原文の « Un as noir si mou qu'omis rions à nu ! » (p. 156) 「なよなよし過ぎて省かれた黒のエース、裸で笑おう！」という一見して意味不明の文は、実は逆からも読める回文であり、すなわちここではリポグラムとの二重制約文となっている。ドイツ語訳では逐語訳され、英語訳では削除されたという代物だ。これに対してヴァレリー・キスロフは、回文としての再現はもちろん、制約下の言語状況の暗示を書き加えてさえいる—— « Черт ! И в аду мрак карм удавит реч[ь] ! » (p. 193) 「悪魔よ！地獄でもカルマの闇が言葉を押し潰す！」

日本語訳においては、「可能だという理由で安易に充填してはならない<sup>18)</sup>」と訳者本人が述べている通り、この種の処置は敬遠される傾向にあると言える。一方で塩塚秀一郎は、タイトルである『煙滅』という語に関して、原典との関係においてはむしろ一層重大な意味を持つであろうその機能に言及している。

この語は「(インメツ〔湮滅〕の誤りから)あとかたもなく消えてなくなる事」(広辞苑)と説明されており、そもそも「誤り」から生じた語である点がいかにペレックに似つかわしいし、「イ→エ」の交替が制約の交替「E→い」と対応しているのも偶然とはいえ面白い<sup>19)</sup>。

実のところ、これによって明らかとなるのは、その表題が持つ多義性の妙のみに留まらない。翻訳がタイトルを通して原典に目配せするという事、翻訳が自らの内部において原典という「もう一つのテキスト」を示唆すること——『煙滅』という表題が持つこのメタテキスト性は、翻訳という存在が原理的には関わりえない問題へのとば口を開いている。かくして浮上するのは、一つの撞着とも言える現象、すなわち、翻訳と原典の間テキスト性 *intertextualité* なのだ。

他の二つの訳においても、同様の事態は見られる。*La Disparition* で一度だけ現れる « *Auschwitz* » という語は、A 禁止のスペイン語訳において « *Uschwitz* » という形で登場する。ペレックがユダヤ系の出自で、その母親がアウシュヴィッツで死んだとされる伝記的事実を鑑み、他とは置き換え不可能な地名と判断されたのだろう。注目すべきは、スペイン語訳の同箇所にも « *Bergen-Belsen* » という別の強制収容所の名が独自に追加されているということである——« [...] *perciesen por su orden en Bergen-Belsen, o en Uschwitz » (p. 255) (「[...] 彼らは命令によって *Bergen-Belsen* か *Uschwitz* で死ぬだろう<sup>20)</sup>」)。その綴りにおける E のモノヴォカリスム、つまり E での母音の統一によって、この語は原典への媒介として機能することになるだろう<sup>21)</sup>。自伝的作品『Wあるいは子供の頃の思い出』(*W, ou le souvenir d'enfance*, 1975) の巻頭句に置かれた « *Pour E* » が如実に示すとおり、ペレックにおいて E の消滅は、その同音異義である「彼ら *eux*」の消滅、すなわち幼少時の両親の死と重ね合わせられる。この制約が持つ多層的な意味作用——「E/*eux* 無しで書く」ということ——を移植できない翻訳は、欠落の象徴の文字をその名に積んだ強制収容所を置くことで、原典とその作者へのオマージュとするのである。そして、同じ訳文が « *perciesen* » (「死ぬ／消滅する」) という語を伴うことで、その効果は強調されるほかない。*

ロシア語訳の場合、こうした間テキスト性の付与は、より露骨かつ挑発的な方法で行われる。翻訳者は、主要人物の一人である Arthur Wilburg Savorgnan を « *Верси-Ярн* » と改名させたが、この名にはフランス語で « *version* » に相当す

る語 « версия » が潜んでいる<sup>22)</sup>。つまり、この翻訳は訳文の中に、「自らは翻訳 (version) である」という表明を書き加えたのだ。そうして逆説的に、オリジナルの透明な翻訳であることを止めるのである。

#### 4. 結論

以上のように、テキストの書き換えに始まり、「加筆」と「修正」を行い、さらには自らを別のヴァージョンとして指さす身振りさえ見せるこれらの翻訳は、「ゲーム」としての原理的な同一性に依拠しようとしながらも、決してそのモデルに同化はしない。したがって、こうした「模倣」と「乖離」とを同時に志向する翻訳において問題となるのは、原典との互換性よりもむしろ連続性なのだと言える。つまり、それは *La Disparition* に続いて書かれたもう一つのテキストとして、原典の代わりにではなく原典を伴って読者に働きかけるのである。

この特徴は、翻訳というジャンルの中では極めて異質であり、矛盾でさえある。しかしながら、一つの文学的作業の性質としては、ペレックの意向に完全に適合するだろうと考えるほかない。つまり、原典からのそうした変形と派生による創造は、ペレックを一員とするウリポの作法、そしてペレック自身が諸作品の随所で見せる手法そのものなのである。例えば、とあるウリポの実践においては、先程も登場したプルーストの一文が、アナグラム、回文、アレクサンドラン、そしてA無し、E無し、I無しなどで、数十種類の制約を通して書き換えられていく<sup>23)</sup>。ペレックが *La Disparition* において、マラルメやランボー、ボードレー、さらには自らの過去の作品をリポグラムの下での「引用」の対象としたのも、同じ種類の行為だ。こうした作業——制約下の同言語内「翻訳」と呼びうる作業——が前提としているのは近似性にもとづく差異を生むことなのであり、それがこの一連の書き換えの創造性を保証している。そしてそこでは、原典は不可侵の限界点ではなく、引き出すべき潜在性を持った出発点として捉えられているのである。

制約の遂行のみならず、それに由来した「翻訳 traduction」と「変形 transformation」という概念の融合によっても、*La Disparition* は典型的なウリポ的作品だと言える。そして本稿で確認されたのは、このテキストを他の言語に移し変えるという行為もまた、この両方の観点でウリポ的实践となる、ないしはそうならざるをえないということである。おそらくこの作品は、宿命的に、

何らかの制約の下で変換されうる別の姿をイメージさせるのだ——例えば *La Disparition* がもし A 無しで書かれていたらとジェラルド・ジュネットが仮定したように、あるいはジャン・リカルドゥーが E 無しのままの書き換えを実行したように<sup>24)</sup>。さらには、制約の不在における「E 有りの *La Disparition*」という仮想的な「草稿」を思い描くことさえもできるだろう。そのように、この作品は本質的に複数性を内在した作品なのだ。そして、A 無しでのスペイン語、O 無しでのロシア語、い段無しでの日本語訳は、別の言語を媒体としながら、その潜在性を引き出しているのだと言える。かくしてこれらの翻訳においては、「原典の代役を果たさない」という事実が例外的に、読者にとっての紛れも無い喜びとなりうるのである。

(学習院大学大学院博士後期課程)

#### 注

- 1) Jorge Luis Borges, « Las versiones homéricas », dans *Obras Completas*, t. 1, Buenos Aires, Emecé, 1996, p. 243.
- 2) Denoël, 1969. 以下、同書からの引用の際は本文中に頁番号のみ記す。
- 3) 一例として以下を参照。Georges Perec, « En dialogue avec l'époque », dans *Entretiens et conférences*, vol. II, Joseph K., 2003, p. 63.
- 4) 何らかの文字の使用を禁じて書かれたテキスト、ないしはそういった制約。
- 5) « A propos de la description », dans *Entretiens et conférences*, vol. II, *op. cit.*, p. 237.
- 6) Eugene A. Nida et Charles R. Taber, *The Theory and Poetics of Translation*, Leiden, United Bible Societies, 1969, p. 4.
- 7) 2012年8月現在で刊行済みの翻訳は以下の通り。ドイツ語：Anton Voyls *Fortgang*, trad. par Eugen Helmle, Frankfurt am Main, Zweitausendeins, 1986；英語：A *Void*, trad. par Gilbert Adair, Boston, David R. Godine, 1995；イタリア語：La *Scomparsa*, trad. par Piero Falchetta, Napoli, Guida, 1995；スペイン語：El *Secuestro*, trad. par Marc Parayre et al., Barcelona, Anagrama, 1997；スウェーデン語：Försvinna, trad. par Sture Pyk, Stockholm, Bonnier, 2000；トルコ語：Kayboluş, trad. par Cemal Yardımcı, Istanbul, Ayrıntı, 2005；ロシア語：Исчезание, trad. par Valéry Kislov, Sankt-Peterburg, Izd-vo Ivana Limbakha, 2005；オランダ語：'t *Manco*, trad. par Guido van de Wiel, Amsterdam, Arbeiderspers, 2009；日本語：『煙滅』、塩塚秀一郎訳、水声社、2010年；ルーマニア語：Dispariția, trad. par Serban Foarta, Bucarest, Art, 2011. 以下、上記諸翻訳からの引用の際は全て同じ版に従い、本文中に頁番号のみ記す。
- 8) Harry Mathews, « Vanishing point », dans *The Case of The Persevering Maltese*, Champaign, Dalkey Archive Press, 2003, p. 284.
- 9) これらいずれの制約設定においても、原典のそれと同じく、当該言語での文字頻度

がその根拠とされている。一方、最高頻度の文字が別にあるにも関わらずEの制約を保守した例としては、トルコ語訳や、近日刊行予定の Vanda Mikšić によるクロアチア語訳が挙げられる。

- 10) Cf. John Lee, « Une stratégie traductive pour *La Disparition* », in *Palimpsestes*, n° 12, Presses de la Sorbonne Nouvelle, 2000, p. 118.
- 11) 以下の説明については、マルク・パレイールによる自らの翻訳の解説 (Marc Parayre, « *La Disparition* : Ah, le livre sans E ! *El Secuestro* : Euh... un livre sans A ? », in *Formules*, n° 2, Noesis, 1998) 及びオランダ語訳 't Manco の後書きを参考とした。
- 12) Marc Parayre, *ibid.*, p. 67.
- 13) マルク・パレイールの前掲論文に併せ、ロシア語訳についても翻訳者本人による以下の論文を参考とした。Valéry Kislov, « Traduire *La Disparition* », in *Formules*, n°10, Noesis, 2006. なお、表内での「反映無し」という記述は、翻訳者がその該当箇所についていかなる説明も残しておらず、かつ本稿論者としても訳文上にいかなる仕掛けも認められないことを理由とした、暫定的な判断による。
- 14) 数多の先行研究に共通するささやかな誤解を修正すべく注記するなら、この部と章それぞれに生じた欠落は決して同種のものではない。つまり、第5章はその存在自体が欠如しているのに対し、第2部はあくまでその見出しが消されたに過ぎない。よって第2部は依然として作品の一部をなし、それは (第1部に属すると思われがちな) 第6章から第8章によって構成されている。その根拠を得るためには、次のことを問う必要がある。なぜ第3部の始まりが第9章なのか、なぜ第4部が第15章、第5部が第21章、第6部が第25章から開始されねばならなかったのか？
- 15) 塩塚秀一郎、「訳者あとがき」、『煙滅』、354頁。
- 16) Valéry Kislov, « Traduire *La Disparition* », *op. cit.*, p. 306-307.
- 17) Umberto Eco, « Introduction à *Exercices de style* de Raymond Queneau », in *Formules*, n° 2, Noesis, 1998, p. 26. 実際、マルク・パレイールはこのエーコの見解を自分たちの翻訳の方針に非常に近いものとして見ている。Cf. « *La Disparition* : Ah, le livre sans E ! *EL Secuestro* : Euh... un livre sans A ? », *op. cit.* p. 68.
- 18) 「訳者あとがき」、『煙滅』、364頁。
- 19) 同上、365頁。
- 20) 原典での対応箇所は以下の通り。「[...] il vous foutrait tout ça à Auschwitz sitôt qu'il aurait l'occasion. » (p. 295) 「[...] 機会が来たらすぐに全員まとめてアウシュヴィッツにぶちこむだろう」。
- 21) Cf. Marie Séonnet, *Enjeux et stratégies traductives dans le cas d'un texte à contrainte lipogrammatique*, Mémoire de Maîtrise, Paris III, 1999, p. 82.
- 22) Cf. Valéry Kislov, « Traduire *La Disparition* », *op. cit.*, p. 295.
- 23) Georges Perec, Harry Mathews et al., *35 variations*, Le Castor Astral, 2000.
- 24) Cf. Gérard Genette, *Palimpsestes*, Seuil, 1982, p. 49 ; Jean Ricardou, « La contrainte corollaire », in *Formules*, n° 3, Noesis, 1999.